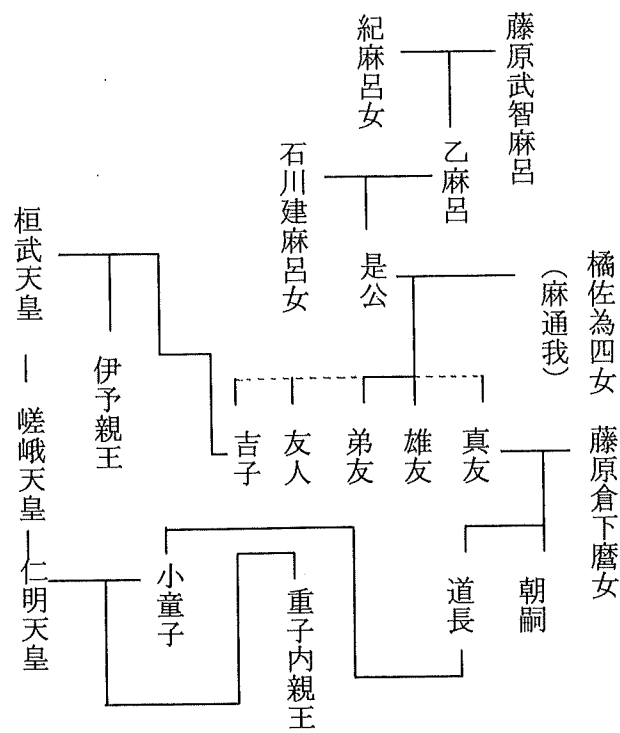


# 仁明天皇女 重子内親王

重子内親王の生母は諸史料によれば、藤原道長女小童子である。祖父道長はいまでもなく、あの有名な北家藤原道長とは同姓同名の別人で、南家は公の孫にあたる（左記略系図参照）。



## 皇女研究会

※友人と吉子は真都賀の子であるかは不明

南家は、是公女吉子が桓武天皇の後宮に入り、伊予親王を儲けたが、大同二年（八〇七）のいわゆる伊予親王の変により、母子ともども自殺に追い込まれた。この事件は式家仲成と薬子等による南家排斥の謀略であったと考えられている。伊予親王と吉子はほどなく、名誉を回復されたが、南家が再び政治の中心となることはなかった。

是公の子どもたちは真友・雄友・吉子が『尊卑分脈』に記される。この中では二番目に記載される雄友が参議正三位まで進み、もともと活躍した。重子内親王の外祖父道長は真友の子で、極官は越中権守従五位下である。重子内親王の生母、小童子は『三代実録』および『皇胤系図』に「宮人藤原小童子所生也」と書かれているので、宮人すなわち下級の官女であった。仁明天皇の後妃のうち、「宮人」とされるのは、藤原賀登子（常陸守藤原福当麻呂女）、高

宗女王（從五位上岡屋王女）、山口氏（詳細不明）とこの小童子である。このうち山口氏所生の皇子は賜姓されている。

さて、小童子はいつ頃宮中に入ったかを推定するとき、通常、最大の手がかりとなるのは父方の官人の経歴である。父道長の記録は『三代実録』貞観七年（八六五）七月二日の重子内親王自身の薨伝に「母從五位下藤原道長之女也」と記されるほかは、『尊卑分脈』に「越中權守」「從五位下」「母同（藤原藏下磨女）」と記されるのみである。小童子の祖父にあたる藤原真友の経歴をみると、『公卿補任』によれば南家藤原是公次男で、母は橘佐為四女と書かれている。生まれたのは天平十四年（七四二）。南家で最終的に一番高位についた三男雄友とは同母とされ、真友は十二歳年長の兄ということになる。しかし、延暦四年（七八五）正月、真友は從五位上となったが、四月には雄友も從五位上となり位が並んでいる。そして翌延暦五年（七八六）正月の人事において、雄友は正五位上となり、兄真友を抜いた。参議になったのも雄友が先で延暦九年（七九〇）二月、真友の参議就任はそれから四年後の延暦十三年（七九四）

十月であつた。真友と雄友は十二歳、年の開きがあり、雄友がいかに優秀であつたとしても同母兄弟であるなら、これはいささか不審であるといわざるをえない。しかも『尊卑分脈』には、雄友の項に「母橘佐為女」と傍書され、兄である真友には「母同雄友」と傍書されている。これも通常とは逆である。この兩名の母とされる橘佐為四女は尚蔵從三位麻通我のことである。麻通我の経歴をみると、天平宝字五年（七六一）正月二日の叙位で從五位下となり、そののち、左記のように昇叙された。

天平神護元年（七六四）	正月七日	從五位上
宝龜二年（七七二）	正月十五日	正五位下
宝龜三年（七七二）	正月十日	正五位上
宝龜七年（七七六）	正月一日	從四位下
天応元年（七八一）	十一月二十日	從四位上
延暦四年（七八五）	正月九日	正四位上
延暦五年（七八六）	正月十四日	從三位

この中で、特に注目し値するのが延暦年間の昇叙である。先に述べたように雄友と真友の位が逆転したのと同じ年であつた。これに『尊卑分脈』の傍書の記述を合わせて考

えると、真友は麻通我の実子ではないと考えるべきであろう。真友の孫である小童子が「官人」という下級女官であつたのも、そのことを窺わせる。

真友の次男である道長が誕生したのがいつ頃かは全く不明であるが、大体十六歳を目安に考えると、真友が参議となつた延暦十三年頃、道長は三十代後半となる。

小童子が宮中に出仕した時期に関しては、更に、正良親王（後の仁明天皇）の年齢を考え合わせる必要がある。女官として出仕して正良親王の目に留まつたとすれば、ほぼ同年代ではなかつたかと思われる。正良親王が誕生したのは、弘仁元年（八一〇）。この頃に生まれたとすれば、小童子は、道長晩年の子となり、特に問題はない。小童子は仁明後宮に入り、皇女を産んでいるにもかかわらず、『尊卑分脈』には該当する女子は記されない。したがつて小童子自身の生母も身分は低かつたと思われる。

正良親王が立坊したのは弘仁十四年（八二三）、十四歳のときである。藤原順子（冬嗣女）、藤原澤子（総継女）などは、親王時代に入侍したと考えられ、その他にも藤原貞子（三守女）などの后妃がいたことを考え合わせると、

小童子の後宮入りはそれほど早くはなかつたのではないかと思われる。しかし、可能性ということを考えて、重子内親王の誕生の上限を弘仁十五年（八二四）とすれば、重子内親王は、薨時四十二歳ほどであつたということになる。実際はもっと若かつたとみるべきであろう。

真友はすでに延暦十六年（七九七）大蔵卿参議從四位上を極官として亡くなり、雄友も正良親王が誕生した年に亡くなつている。雄友は大同二年（八〇七）の伊予親王の変から官位を回復され、薨時正三位宮内卿、即日勅命により贈大納言とされた。しかし、藤原南家の勢力は回復することはなく、真友・雄友の次の世代は共に從五位国守クラスにとどまつた。このような状況から判断して、小童子の後宮入りは南家の地位回復等の政治的な思惑から生じたものではなかつたとみるべきである。

なお、「小童子」という名前は角田文衛氏の『日本の女性名（上）』には特に取り上げられてはいないが、その中の記述から、宮中での候名であつたと思われる。

（一文字 昭子）

●史料

重子内親王（母藤原小童子）「頭注」又云、貞観七年七月二日、无品重子内親王薨『本朝皇胤紹運録』

重子内親王 母藤原小童子從四位下道長女『帝王編年記』  
重子内親王 母從五位上藤少童子從五位下道長女貞観七年七月二日薨

二日辛巳。無品重子内親王薨。依内親王平生辭讓。不任縁葬諸司。輟朝三日。内親王者。仁明天皇之皇女。母從五位下藤原朝臣道長之女也。『三大実録』貞観七年七月二日条

注

「『本朝皇胤紹運録』『帝王編年記』『一代要記』による。  
なお『日本女性人名辞典』（日本図書センター・一九九三年）などでは「わらわこ」と読んでいる。

<sup>12</sup> 大塚徳郎『平安初期政治史研究』昭和五十三年・吉川弘文館

<sup>13</sup> 『尊卑分脈』による。

<sup>14</sup> 角田文衛『日本の女性名（上）』（教育社・一九八〇年）に「女房とは称されない下級の官女（宮人）や侍女は別種の候名でよばれた。「承香殿のあこぎ」などはその例である。」とする。

<sup>15</sup> 岡屋王は天武天皇皇子高市皇子の孫に当たる。

<sup>16</sup> 『公卿補任』延暦十三年

<sup>17</sup> 『公卿補任』延暦十三年の記事からの逆算による。

<sup>18</sup> 『尊卑分脈』橘氏の項による。なお、『続日本紀』には「麻都賀」「真都我」「真束」「麻都我」「真都賀」、『公卿補任』延暦十三年真友の項には「麻乙」と表記には揺れがある。また『尊卑分脈』南祖左大臣武智麿四男の許人麿の項に「母從三橘佐為女」との傍書があるが、これについては別稿に譲る。

<sup>19</sup> 真友が十六歳のとき（七五七）に道長が誕生したとする。

<sup>20</sup> 『尊卑分脈』による。

<sup>21</sup> 注4参照